

133 明治15年1月14日 菊池長閑宛

(長閑注記) 明十五 一月十四日 第二号

去十一日に彼金貨を二百三十八円六五に売払たり即ち百に付百八十五円の割合なり公債証書の直段(マ)即今途方もなく宜き故未た買へき時ならずと存す去夏調たる時分の直と八一円に付十銭余も高し」去る九日始て大学に出席して生徒に面会いたし十一日より愈(隔日に二時間ツム)講義を始たり講義とは以前の如く書物を控居て其文句の訳解をする事ならて諸書を参考し又ハ自分の見をも加へて作り出したる講釈を云ふなれハ丁度自分にて新に本を著述するも同然の仕事故実に骨か折て忙敷事限りなし往々ハ兎も角即今ハ役所より戻るや否や下調に取懸り毎夜十時頃迄宛夫に而已はまり居なり人ハ忙敷程業に成事なければとも年中斯てハ随分込りものと考居候書生中とハ違ひ諸事を打捨てると云ふ訳にハ参らす多少家主の關係もあり来客もあり招待に預る事もある故思ふ程仕事か抄取らす今分の所にてハ世の中の突合ハ憂るさいと思はるゝ様なり又彼講義ハエギリス語にて仕る事なり生徒ハ夫を英語にて書取りて覚の種と致す趣向なり只ちよい／＼した譬とか例とか杯ハ日本語にて解明かす事も

あり今迄ハ教られたる事のみにて此度始て人を教ゆる株に成たる事なれハ生徒等から先生と呼ばれると何たか自分に恥かしい様にもあり可笑しくもあるなり何に角大学ハ元世話に成たる古巣なれハ及ふ丈勤る心得なり

父君

武夫

(長閑注記)

「一月廿四日達ス 返事二月四日出」